



【共通】

◆当面する重点作業について

1. 剪定の見直し、若木等の誘引、日焼け防止対策は、開花前に終了させる。
2. 発芽前の薬剤防除実施が、遅れないよう注意する。

【プルーン・すもも】

◆第1回薬剤散布について

1. 散布時期：発芽前

実際散布月日	月	日
--------	---	---
2. 使用薬剤（混用順記載）※調合量95ℓ当り・10a当り散布量：350ℓ以上

農薬名	使用倍率	調合量	収穫前	病害虫
展着剤	10,000倍	10ml	—	—
石灰硫黄合剤	20倍	5ℓ	発芽前	越冬病害虫

3. 散布上の留意事項
 - 1) ふくろみ病発生が心配される園は、石灰硫黄合剤を10倍（水90ℓ当り10ℓ）で使用する。
 - 2) 発芽した場合は、薬害防止のため、石灰硫黄合剤に代えて、トレノックスフロアブル500倍（水100ℓ当り200ml・年3回まで）を使用する。生育状況をよく確認し、農薬登録、薬害（枝枯れ等）対策上、温暖無風を選び必ず発芽前に実施する。

◆黒斑病特別薬剤散布について

すももで発生が多い。毎年の発生が多い園は実施する。

1. 散布時期：開花前

実際散布月日	月	日
--------	---	---
2. 使用薬剤（混用順記載）※調合量97ℓ当り・10a当り散布量：350ℓ以上

農薬名	使用倍率	調合量	収穫前	病害虫
ICボルドー412	33倍	3kg	—	黒斑病
固着性展着剤K.Kステッカー	3,000倍	33ml	—	—

3. 散布上の留意事項
 - 1) 固着性展着剤K.Kステッカーに代えて、固着性展着剤アビオンE1,500倍（水100ℓ当り66ml）を使用してもよい。この場合、最初に調合する。

【おうとう】

◆第1回薬剤散布について

1. 散布時期：発芽前

実際散布月日	月	日
--------	---	---
2. 使用薬剤（混用順記載）※調合量97ℓ当り・10a当り散布量：棚300ℓ以上・立木350ℓ以上

農薬名	使用倍率	調合量	収穫前	病害虫
スプレーオイル	33倍	3ℓ	発芽前	ウメシロカイガラムシ

3. 散布上の留意事項
 - 1) スプレーオイルに代えて、ハーベストオイル50倍（水98ℓ当り2ℓ）を使用してもよい。

【あんず】

◆年間わら巻き(胴枯れ病対策)実施について

毎年、胴枯れ病により枯れる樹がみられるので、被害の多い地帯では年間を通してワラを巻き、被害を軽減する対策を実施する。

◆第2回薬剤散布について

1. 散布時期：開花直前

	実際散布月日		月		日
--	--------	--	---	--	---
2. 使用薬剤(混用順記載) ※調合量1000l当り・10a当り散布量：3000以上

農薬名	使用倍率	調合量	収穫前	病害虫
固着性展着剤アビオンE	1,500倍	66ml	—	—
ムッシュボルドーDF	500倍	200g	葉芽発芽前	かいよう病
ロブラール水和剤	1,500倍	66g	3日	灰星病

3. 散布上の留意事項
 - 1) アビオンEに代えて、固着性展着剤K。Kステッカー3,000倍(水1000l当り33ml)を使用してもよい。ただし、最後に調合する。

【なし】

◆当面の技術対策について

1. 枝の誘引作業を丁寧に実施し、樹形を整える。
2. 胴枯れ病・腐らん病を見つけ次第、削り取り等の処置並びに保護をする。

◆第1回薬剤散布について

1. 散布時期：発芽前

	実際散布月日		月		日
--	--------	--	---	--	---
2. 使用薬剤(混用順記載) ※調合量880l当り・10a当り散布量：棚3000以上・立木3500以上

農薬名	使用倍率	調合量	収穫前	病害虫
スプレーオイル	50倍	20l	発芽前	アブラムシ類・ハダニ類・ナシマルカイガラムシ
石灰硫黄合剤	10倍	100l	発芽前	

3. 散布上の留意事項
 - 1) カイガラムシ類発生園は、重要な防除となる。樹冠内部や主幹部にも十分薬液が掛かるよう実施する。
 - 2) スプレーオイルに代えて、ハーベストオイル50倍(水880l当り20l)を使用してもよい。

◆日本なしの芽すぐり実施について

1. 目的と効果
 - 1) 充実した花芽を残して揃え、開花に無駄な養分を使わないことにより初期の玉肥大の向上につながり、良い果実の生産につながる。
 - 2) 「芽たたき」より作業期間があり、凍霜害の危険も少ない。また、摘果作業の省力になる。
 - 3) 開花時の農薬散布がかかりやすくなる。
2. 残す程度
 - 1) 短果枝が生姜芽のように固まっているような場所は、充実した芽を1~2芽残して他の芽はせん除する。
 - 2) 短果枝群は片側15cm間隔で残す。横向きか斜め下向きの短果枝群を残し、上下は取り除く。
 - 3) 上向きに発生している短果枝群を残すと逆さ実になり、下向きは小玉になりやすい。
3. 選ぶ芽(図参照)
 - 1) 上に向いた芽・力の弱い下芽は原則としてすぐり、横芽・斜め上芽を主体に残す。
 - 2) 芽が無い場合は下芽を残してもよい。

